

水戸藩「刑典摘要」について

— 解題と翻刻 —

神 崎 直 美

「解 題」

一

本稿は、茨城県立歴史館が所蔵する「刑典摘要」の解題と翻刻を試みたものである。当史料は『茨城県歴史館和書目録 二』に、その表題を「水戸藩郡方 刑典摘要」として収載されている^①。これは、一連の史料群の中の一本として存するものではなく、歴史館が購入した単独の史料である^②。

「刑典摘要」は、常陸国水戸藩（御三家、三十五万石）の郡奉行所もしくはその役人が作成した刑事関係史料である。実は、当藩の刑事関係の史料は、現存数がわずかである。ゆえに、これまでに水戸藩の刑罰については、その種類やそれぞれの刑罰は如何なるものなのかということについて、地誌などごく簡単に説明されることがあるにすぎ

ない。^③そのため、依然として不明な部分が多い。

このような状況の中で、「刑典摘要」はまとまった刑事関係史料として、現存する稀少なものである。実にさやかな冊子ではあるが、水戸藩の刑事関係について、新たに窺い知ることができる史料である。そこで、当史料をここに紹介する次第である。^④

二

「刑典摘要」は、墨付五十四丁からなる一本の冊子である。縦は二十四、一糎、横は十五、九糎である。その内容の構成は、前書に相当する記載、目録（目次）、本文からなる。目録、本文共に三十七項目からなる。さらに本文には、三十七項目の後に、いわば番外の書類として「大赦目当」と宝引の事例を掲載している。各項目には、それに相当する達や事例を収載している。その数は、都合七十四点である。そのうち、制定年代が明記してあるものは五十九点である。

「刑典摘要」には、その作成年代や作成者について、一切明記していない。しかし、これは、幕末—嘉永四年三月（一八五二）から同六年三月（一八五三）までの間に郡奉行所もしくはその役人が作成したものと思われる。その理由は以下の通りである。

まず、作成年代である。項目をたてて編纂した部分に記した書類のうち、最も年代の新しいものが、嘉永四年三月であること、ならびに、編纂終了後に冊子末の余白に書きこんだ書類の年代が嘉永六年三月であることによる。すなわち、編纂はこの間なのである。

次に、作成者についてである。まず項目を概観すると、その大部分が、郡方の者が犯した犯罪に関するもの、および郡奉行が処置に携わる軽犯罪に関するものである。死刑のような厳しい処罰に関するものは一切なく、軽微なもの

ばかりである。さらに、ここに収載した書類は、藩庁から郡方に宛てた達や、郡奉行所から町奉行所に対して問い合わせたその返答、郡奉行間での問い合わせ、郡奉行から藩庁への問い合わせなど、いずれも郡奉行所が関与している。以上により、郡方に関わる者が作成したことは確かである。しかし、郡奉行所が役所として公的に作成したのか、それともその配下の役人が私的に手控えとして作成したのか、そのいずれなのかは確定できない。

ところで、ここで「刑典摘要」という名称について考えてみよう。「刑典」というと、体系的な刑法典を想像しがちである。しかしながら、当藩は判例主義であり、^⑤刑法典が作成された形跡はない。さらに、「刑典摘要」に収載された事項は、刑法典の条文ではなく、それまでの藩政の過程で、時宜に応じて随時発令したさまざまな書類である。ゆえに、ここでいう「刑典」とは当藩における刑事関係の書類全般を指すといえよう。「摘要」とは、要点を抜き書きすることである。したがって、刑事に関する様々な書類のなかから重要な部分、すなわち郡奉行所もしくは役人にとって、実務として必要な事項を抜粋してまとめたものと考えるのが妥当であろう。

「刑典摘要」は、その体裁の特徴からも、本来は実務上の必要から作成されたものであることが窺える。まず、それぞれの目録および項目の冒頭には、朱で通し番号を付記している点である。これは、利用の便を図ったものである。さらに、本文の項目の記述は、それぞれの項目の末尾に次の項目を続けることはせず余白を設けている。つまり、項目の書き初めは、必ず左の丁から記しているのである。^⑥これは、将来において新たな通達などが発令された折に、それを追加して記すことを想定して配慮を施したものである。

しかしながら、「刑典摘要」は作成したものの、実際には実務の場でほとんど利用されなかったものと思われる。それは、史料そのものがたいへんきれいな状態で現存していることによる。頻繁に利用されたならば、紙面に手擦れなどが残るはずだが、そういう形跡がほとんど見られないのである。しかも、この史料の筆跡は、同一人物による同時期のものである。その後も必要事項が生じた場合には、折々書き継いでゆく予定で作成したものの、結局、そのま

まになってしまったようである。

三

さて、この「刑典摘要」から、水戸藩の刑罰をめぐって注目すべき点がいくつか指摘できるので、ここに示しておきたい。

第一に、当藩では近世中期の後半頃から、刑罰について迅速な対応が求められていたことである。それは、冒頭の前書に相当する記載に明らかである。これは寛政三年（一七九一）四月二十三日の年記を持つ。その内容は、罪人を吟味するにあたり速やかに対応することの重要性を、役人らに対して提示した書類である。ここでは、取り調べの意義とは、生路を求めるものであること、そのためには簡略化して迅速な対応をすることが必要であることを示している。

つまり、寛政三年当時には迅速な対応ができていないという現実が存するからこそ、このような規定がなされたのである。そして、幕末に作成した「刑典摘要」の冒頭にこの書類を掲げたのは、「刑典摘要」を作成した当時も同様な状況であったからだろう。同時に、「刑典摘要」の作成者は、刑事関係の実務に携わる者として、迅速な対応は最も重要な心がまえと思ったのであろうし、ゆえに改善の必要を感じたのであろう。ひいては、それこそが「刑典摘要」を作成した目的といえるかもしれない。

第二に、当藩では天保年間という時期が刑事関係についても、一つの転換期であり、多くの改正がなされた時期と思われることである。本書に収載されている書類の年代についてみてみよう。年代が明記されている五十九点のうち、その上限は貞享二年（一六八五）十月の事例があり、これに続く事例は享保年間である。その後、天明年間のものは二点、寛政年間と享和年間の書類がそれぞれ三点ずつ存する。文化年間の事例は、十九点もある。文政年間のものは

五点であるが、天保年間の事例は二十三点もあり、これが最多である。弘化年間のものは一点、嘉永年間のものは二点である。つまり、ここに収載した書類は、近世後期の文化年間と天保年間の事例がその大部分を占め、しかも天保年間のものが極めて多いのである。これは当藩の天保改革に伴い、刑事関係についても多くの改正がなされたことを反映しているのであろう。

第三に、刑罰を決定する際に参考にした書類についてである。当藩は判例主義であるが、それに加えて、幕府の対応および幕府が制定した法典である「公事方御定書」や、中国の明の律令も参考にしつつ決定していた様子が窺えるのである。幕府に準じた様子は、項目四の享和三年三月の達、項目七の文化二年（一八〇五）八月の問合、項目十一の文化二年十月の口達および例、項目十九の天保十年（一八三九）七月の書類、項目二十三の年代不明の書類、項目二十九の文化元年（一八〇四）十一月の付札などに見られる。そのうち、項目二十三には「公辺御定書二基キ」という文言があり、項目二十九では「公事方御定書」の、「拾五歳以下之者御仕置之事」の条文を引用している。^⑦

一方、明の律令を参考にした様子は、項目七の文化二年八月の問合に対する返答の箇所である。この項目七は、牢屋に収容されている者が病気を煩った際に出牢させることに関するものである。ここでは、郡奉行小原忠次郎俊章が明の事例を示した問合をしたのに対して、郡奉行小宮山次郎左衛門昌秀が明の律と令を引用して返答をしている。^⑧引用した箇所は、律は刑律の断獄の獄囚衣糧、令は刑令の司獄と牢獄である。^⑨なお、郡奉行らが明の律令を参考としているのは、当藩において明律も、刑事関係の実務の上で、その拠所として利用されていたことに他ならない。水戸藩において明律は、藩政の上で参考にすべき有効な書物としてその価値が認識され、実際に利用されていたのである。

（１）『茨城県歴史館和書目録 二』（昭和五十五年）、九頁。

（２）『茨城県歴史館和書目録 二』は、寄贈史料と購入史料を収載している。寄贈史料については、その出処を架号に略記し

ている。

(3) 水戸藩の刑罰や司法制度の概要については、『水戸市史』中巻(一)(昭和四十三年)に記述がある(刑罰については、二六二～八頁、司法制度については二六〇～一頁)。これらによると、水戸藩は刑法典を編纂せず、判例主義であったという。なお、刑罰に関する近年の論文としては、野上平「水戸藩農村における刑罰執行について―前半期の極刑例を中心として―」(『郷土文化』第四十号、平成十一年)がある。

(4) かつて私は「水戸藩の徒罪」(拙著『近世日本の法と刑罰』平成十年、巖南堂書店)という論文をまとめる際に、その史料の一つとして「刑典摘要」を用いたことがある。その折は、論文の目的上、徒罪に関する記述のみを利用した。

(5) 『水戸市史』中巻(一)二六〇～一頁。

(6) 全三十七項目のうち、その二十四項目の文末が、見開きの右丁を完全な白紙のまま終えている。

(7) 「公事方御定書」の「拾五歳以下之者御仕置之事」は、『徳川禁令考』別巻(創文社、昭和三十六年)一一七頁にある。

(8) 小原忠次郎俊章については、「水府系纂」四十三巻、小宮山次郎左衛門昌秀については「同」六十二巻にその履歴がある。「水府系纂」は、現在、彰考館文庫がこれを所蔵している。本稿作成に際しては、茨城県歴史館が撮影した当史料を閲覧した。なお、小宮山次郎左衛門昌秀については、拙稿「水戸藩士小宮山昌秀の徒罪認識とその背景」(『中央史学』第二十二号、平成十一年)で、その刑罰や法律関係の思想の淵源として、いかなる書物を読んでいたのかというのを、読書録「閲書目録」から明らかにした。「閲書目録」には、明律についての読書の記録もあり、ここではこれを文政八年(一八二五)に読んだと記している。なお、本稿で記したように、「刑典摘要」には、文化二年時点で小宮山は返答に明律を引用しているので、「閲書目録」での明律の読書年代は、何度目かの読書の折の年代であろう。

(9) それぞれの当該箇所を、『大明律 附大明令 問刑條例』(遼瀋書社、一九八九年)で示すと、刑律の獄囚衣糧は二一〇頁、刑令の司獄は二六七頁、牢獄は二七四頁である。

〔翻 刻〕

凡 例

- 一 この史料は、茨城県立歴史館が所蔵する「刑典摘要」(架号「和九―三九」)を翻刻するものである。
- 一 翻刻にあたっては、原文に読点・並列点を施した。
- 一 朱筆の部分は、その箇所を「」で記し、その旨を注記した。
- 一 翻刻者が補ったり訂正を施した部分は、「〔 〕」をもって示した。
- 一 判読不能な字は、□をもって示した。

刑典摘要

〔縦二四、一糎・横十五、九糎〕

寛政三年四月廿三日 罪人吟味之事ニ付、其役人
被下候御書之写

都て罪科之者穿鑿いたし候義、前々糎糎明之致方行届宜候へ共、餘リ瑣細之處迄致穿鑿候得ハ、批判ニ至り候迄ニハ甚日数も縣リ、入獄之者ハ尚更難義ニも有之、中ニハ死罪ニ不至者も牢死いたし歎敷事ニ候、一体之處、初発格心之筋ヲ以遂糎明候得ハ可備處、彼是穿鑿いたし候て、其外之科申口々出候得ハ、其方之穿鑿重ニもなり、重科罪ニ陥り候類も可有之哉、左候得ハ不便之義ニも有之、猶又拘り廣く成候様相成候事も可有之間、於一体格心之筋等其一ト通分り候ハ、夫ニて刑目論候方可然候様存候、たとへハ先頃多田村医師昌哲、同村次郎左衛門と申者娘と不義之事ニ付穿鑿之趣為説聞候ニ、夫有之内糎致密通候哉之境糎明之振ニ相見候處、右等之義ハ糎ニも不及候事之様ニ存候、密夫と成候てハ嚴科ニも可所義ニて、頭候事ハ不及是非候得共、左も無之穿鑿之上ニて枝葉之方へ穿鑿暮候罪科ヲ釀成候様ニてハ、不可然義之様ニ存候、一体之處ヲ論候てハ、如比瑣ニたる昌哲如キもの明分可に穿鑿行届候迄、国政届不届と申ニも無之、古来糎

之穿鑿方之いたし癖之様ニて余り不宜様ニ被存候、生路ヲ求候ヲ穿鑿之準的ニも可有之哉、左候連、大悪大慙とか申大悪人抔ハ、生路ヲ求むへき事ニも無之候、其外賊罪或ハ夜盜・切取等之義いたし候者、是又生路ヲ求るに不

刑典摘要目録

〔朱筆〕一 御城下追放御定之事

付、御殿場村々之事

〔朱筆〕一 御場所へ指出候罪人穿鑿心得之事

〔朱筆〕一 女追放御郡方取計之事

〔朱筆〕一 村預・親類預之者、出奔尋方等申附振之事

〔朱筆〕一 追放人元居村へ立入之節、止宿為致候父母・妻

子・女咎振之事

〔朱筆〕一 他扱え引張候穿鑿心得振之事

〔朱筆〕一 禁獄并穿鑿不濟牢舎之者、病氣出牢之事

〔朱筆〕一 百姓・町人一同かり博奕催候節、穿鑿并刑当振

之事

〔朱筆〕一 郷士刑当取計心得之事

〔朱筆〕一 追放之者、所持之品欠所取扱振之事

〔朱筆〕一 病者案駄送り取計等閑之村役人咎振之事

及事と存候、前如之様なる瑣細之拘少も穿鑿殘候様、面々心得、深く致糺明候義ハ、已来ハ指略有之候て可然と存候条、穿鑿へ縣り候役柄之者とも、一同右等之心得ニて、一ト通分り候ハ、夫々早々致批判可然事

〔朱筆〕一 新宮建立御規定之事

〔朱筆〕一 給人手形引替延行致候節、村役人咎振之事

〔朱筆〕一 孕婦改方等閑村役人咎振之事

〔朱筆〕一 他参人え御救金拝借願共追て頭候節、村役人等

咎振之事

〔朱筆〕一 一川船無極印船通致候者咎振之事

〔朱筆〕一 御目付方ニて見咎候人殺いたし候者咎振之事

〔朱筆〕一 無願他所神仏へ参詣いたし候者咎振之事

〔朱筆〕一 酌取女召抱置候もの咎振之事

〔朱筆〕一 婚葬等之節、奔修ヲ極候者、刑当振之事

〔朱筆〕一 配符紛失滞等之節咎振之事

〔朱筆〕一 乗打咎振之事

〔朱筆〕一 裏判呼出指日延行之者咎振之事

〔朱筆〕一 摺之事

〔朱筆〕 一敲之事

〔朱筆〕 一徒刑之事

〔朱筆〕 一徒刑大赦之事

〔朱筆〕 一被盜品訴延行并盜品と不心付質取等いたし候者、

〔朱筆〕 咎振之事

〔朱筆〕 一十五才以下刑之事

〔朱筆〕 一裁訴之砌、当人死亡之旨訴出候節、取計振之事

〔朱筆〕 一除帳之者、追放取計振之事

〔朱筆〕 一牢死之者戸取計振之事

〔朱筆〕 一追放・帳外人、獄扶持代之事

〔朱筆〕 一農商共役所呼出之節、羽織着用之事

〔朱筆〕 一御城米等諸貢物、惡物品簾略等咎振之事

〔朱筆〕 一御立山盜木等刑振之事

〔朱筆〕 一諸人無之浪人者指置候者、刑振之事

〔朱筆〕 一「一」御城下追放御定之事

附り、御殿場村之事

貞享二二十月廿四日、御奉行衆の御達
一御城下追放被仰付候もの、自今以後ハ、御城下ハ式

里四方并御殿場有之村ハ徘徊仕間敷由、可申渡旨、被

仰出候事

湊、太田、馬場、瑞龍、川尻、紅葉

右村ハ徘徊無用之旨可申渡候

但、右之外、所ニより存寄之場所所有之候ハ、可

申渡候

一御追放ニ相成候もの、御城下相構、又ハ御城下式里四方相構と兩様ニ相見候處、御城下相構被計ニても、式里四方相構候様御心得被成候ヘハ、若御町内のミ構候事ニて、御城下近村ニ罷在候ても不苦候事ニ可有之哉之旨御問合之趣御座候處、御城下御構と計ニても式里四方相構候御定ニ付、御城下式里四方之内ニ居候てハ不相成義御座候、則、役所定法書抜御廻申候事
天保
五月十四日
御町方

南御郡方

一御城下追放

是ハ御城下ハ東西南北ハ式里ツ、構

一御城下相構居村追放

是ハ御城下ハ東西南北ハ式里ツ、相構候て、居村ヲも相構候

〔朱筆〕

御場所へ指出候罪人穿鑿心得之事

文化十四六月

一罪人之内御場所御吟味ニ可相成と相知候ハ、強繩等ニ

申附相糺候ハ不及候間、以来右之心得ニて取扱候様、

〔奉行・重興〕

赤林三郎左衛門殿へ御達之事

同年七月

一立場者等重き罪人ニて御場所へ指出可申者ハ、穿鑿大

方ニいたし、不問詰指出候様御奉行衆へ御達之事

同年八月廿四日御達〔重同〕

一御奉行野中三三郎殿へ御申聞候ハ、御場所御穿鑿ニ指

出候罪人、たとへハ一旦御場所御吟味之上御達ニて追

放ニ相成候もの立帰候節、御郡方ニて召捕候者抔之類、

都て筋へ指出候科人ハ、最初御郡方ニて糺之節強繩不

申付候てハ相成間敷杯心得候様之義ハ有之間敷也、筋

ニより強繩申付候事ハ乍勿論、御場所へ指出候付、是

非強繩等申付候事ニハ不及義ニ有之間、右等之義ハ程

能見切指出候様可致旨、尤御郡方ニて強繩申付候上指

出候得ハ、品より於御場所穿鑿いたし、悪き事抔も有

之事ニ候間、右之含ニて取扱候様、勿論此義ハ屹と相

達候と申義ニハ無之、心得ニ談置候間、右之趣一同へ

も申合候様ニも御申聞有之事

〔朱筆〕

女追放御郡方取計之事

天保六未閏十月

一女ヲ役所了簡ニて追放申付候例無之ニ付、四郡及相談

候處、明和六丑年、武茂組ニて式里四方追放役所了簡

之上申付候例有之処、右之外ニ女追放取計候例無之ニ

付、奥御祐筆へ御役名ヲ以申出置候処、女追放式里四

方迄ハ役所了簡ニて取計、其余ハ相伺候様ニと宮本長

五郎へ申聞有之候事

〔朱筆〕

〔四〕村預・親類預ケ之者、出奔尋方等申付振之

事

一出奔人由緒五人組等へ尋申付、三十日限り三切都合九

十日之間不尋出候ハ、過料三貫文五貫文位迄為相

納候上永尋申附候様仕度、如先達て奉伺候處、過料之

上永尋申付候てハ重々相成候間、九十日為相尋候ハ、

過料ニ不及永尋申付候而已ニて可然也、今一応了簡之

上可申上段、御達之趣承知仕候、右ハ公辺御取扱之

振ニ準奉伺候義ニ御座候処、御達候振御座候間、九十

日目ニ過料申付、永尋之義ハ指免候様取扱申度奉伺候、

此段又々申上候、メ

(44)

享和三亥

三月三日

御付紙^二御達

出奔人三切ニ尋申付、九十日目過料申付、永尋ハ指

許可申旨被申出候旨義ニ^レ、過料又ハ永尋とも可申

付候

文化九^一申三月申合

一出奔人等三十日ツ、都合切尋申付、不尋出候分ハ、過料之上永尋可申付旨先達て伺出候処、過料之上永尋申

付候てハ重々相成候間、永尋又ハ過料ニも申付、時宜ニ

合両様ニ取扱候様御達ニ相成ニ付致相談候処、過料員

数之義ハ三貫文^五貫文位迄可申付旨、去ル亥年伺之

向も有之ニ付、右之振ヲ以出奔人之父兄・伯叔父・從

弟之内尋申付候者へ、永尋歟過料ニ申付、由緒無之村

尋之者ハ永尋申付候迄ニて可然旨申合候事

〔朱筆〕

〔五〕追放人元居村へ立入候節、止宿為致候父母・

妻子咎振之事

天保二^一卯年

一追放人御構之地へ立入候もの之咎振、父母・夫・其妻

子ヲ止置候後ハ、閉戸又ハ呵・押込等申付候義ハ勿論、

妻子、其父母・夫ヲ止置候へハ、叱・押込申付来候処、

右咎振之意味相当不致候付申合之趣尤ニハ候得共、旨

義ニ^レ候間、弥張是迄之通居置大意ハ申合之趣相合、

其もの之旨義ニ^レ候て見捨又ハ申付候方可然候条、右

之心得ニて取扱候様御達之事

〔朱筆〕

〔六〕他扱え引張候穿鑿心得振之事

文化二^一五^一閏八月

一他扱へ引張候穿鑿物有之節、品ニ^レ起り候支配役所^六

計出張相糺、他扱之ものも其役所へ無断呼出相糺、追

て支配役所へ口書相廻及相談候様御申合ニ付てハ、右

等之節ハ他支配^六呼出ニ隨罷出候様、兼て村々へ申触

置候方可然哉之旨、調役^六申出候間、村触為致候事

〔朱筆〕

〔七〕禁獄并穿鑿不濟牢舎之者、病氣出牢之事

一穿鑿不相濟入獄申付置候者、大病歟或ハ其父母大病ニ

て、外ニ看病人も無之時分^一杯ハ出牢為致、快氣後入獄

申付候事^一杯も御座候様及承申候、是等ハ不苦事之様被

存候、然ル處、其もの之罪状相決候上手錠・禁獄等申

付置候時分、其者大病等前頭様なる義御座候節ハ、無

余義相歟候とも、暫時も指許候義ハ不相成事之様ニ奉

存候、安良川に罷在候時分禁獄申付者、親大病ニて少

之内出牢仕度との願御座候へ共、先例も不相見指置候事にて、御同役へ御相談も相成兼、一已之了簡にて出牢願不相済指戻候得共、^{〔△〕〔朱筆〕}我々式之身之上ニハ論シ兼候

事ニ候へ共、縦ハ初明之宰有之天吏と成ス罪ヲ懲候事ニ候得ハ、禁獄中ニ当人病き又ハ父母等相果候とも、早

^{〔△〕〔朱筆〕}

竟其身罪ヲ犯候故、入獄にて対面不相叶事ハ、是も命

之然らしむる處にて無是非事ニ御座候、禁獄中杯歎訴ニ因て、暫時も免し候様にてハ大躰ニ不叶様被存候、右之通ニハ左候得共、是にて動なれと申程ニハ決定仕兼、御先例ニ不抱理之当否之處、御義論相伺度、急きも不致候間、御手透ニ被仰下度奉願候、^{〔マ〕}

文化二丑八月十日

^{〔郡奉行・俊章〕}
小原忠次郎

^{〔郡奉行・昌秀〕}
小宮山次郎衛門様

^{〔此印の所へ付札〕}
^{〔△〕〔朱筆〕}「入獄人等病ハ格別、父母之看病ニ出候事如何と奉存候、当人病氣にて、其罪死刑ニ当可申者

召捕置候ハ、出牢ハ相成間敷敷、軽罪なれハ当人病氣出牢願相済候事

公義ニハ多御座候事

^{〔朱筆〕}
^{〔△〕}「一禁獄・手錠ハ、最早其罪状極リ申候事故、入牢

之者も却て事軽かるへき敷と存候

^{〔朱筆〕}
^{〔△〕}「一看病願御済無之事御尤ニ御座候

^{〔朱筆〕}
^{〔△〕}「一既に此度禁獄申付置候者、大病引受甚危急之内、

医師申出候處、元來其罪死ニ至らざる者にて御座候處、萬一相果候てハ何共不便成事ニ付、暫時出牢申付療養相加へ、又々禁獄申付候理之当否ハ不及候得共、人の死生ニ拘り申候段不忍候一心不得止事、右之通取扱候得共、如何仕候ものニ候也、私も決兼申候、此度御尋向之趣有之候てハ、猶以心動申候、太田氏杯御相談、又々被仰下候様奉願候、重て之心得ニ御論置申度御座候、^{〔マ〕}

次郎左衛門

明令云、凡各府司獄、專管囚禁、如有冤濫、許令檢挙メ申明、如本府不准ニ直申憲司、各衛門不許差占スルコト、府州縣ノ牢獄、仍委佐貳官一員ニ提調セシメ、其男女ノ罪囚、須ク要各監禁ス、司獄ハ官常ニ加點視^{〔切〕}ヲ、州縣無司獄去處ハ、提牢官點視ス、若囚患病、提牢官檢實、給藥治

療ス、除死罪ハ不開枷杻ヲ外、其餘徒・流・杖罪囚人病重者、開疏ノ枷杻、令親人ヲ入テ視、笞・杖以下保管在外医治病と療フハ、依律断決ス、如事未完者復収ヲ入禁、即與婦結、凡牢獄囚徒年七十以上、十五以下療疾ハ、散収ス、輕重不許混親難^{〔ママ〕}、枷杻常ニ須洗滌ス、薦薦常ニ須鋪置、冬ハ設煖画^{〔匣〕}、夏備涼壤ヲ、無家屬者ハ、日給倉米一舛ヲ、冬給絮衣一件、夜給燈油メハ病給医薬、並令於本處有司添ル、官錢糧ノ内ニ支放セ、官預期メ申明關し給メ、母致缺、有司ハ犯和罪^{〔私〕}、除死罪外、徒・流・鎖収、杖以下ハ散禁ス、公罪自流以下皆散収ス

明律共 断獄ノ上

獄囚衣糧^{〔ママ〕}

凡獄囚^{〔ママ〕}ニ請給衣糧医薬而不請給、患病^{〔脱〕}応脱去、枷鎖担而不脱去、応保管ノ出外而不保管、応聴ス家人入^テ視而不聴、司獄ノ官典・獄牢、笞五十、囚致死者、若囚該死罪、杖六十、流杖八十、徒罪杖一百、杖罪以下、杖六十、徒一年、提牢官知而不举者、與同罪

明朝人節ヲ重する事出し如し、併屈繼^ニも無之、異邪ノ書必とハなしかたかるへき歟

一文化元子三月中、本来崎村出立婦善次郎と申もの、是ハ此度取扱し刑ニ焼印、当完倉領へ追放ニ可成者、未穿鑿半大病ニ付、元居村ニ罷在候妻子へ申付、於牢中ニ看病為致度旨、先役之節伺出候処不相濟候

一同丑八月中、大久保村百姓兵吉と申者致博奕候ニ付、五里四方追放之刑目論伺置候処、大病ニ付居村へ引取療治為致度旨申出候処、矢張牢中ニ療治相加候様御達、是又不相濟候、

以上石神組へ御達、并律令之文有之候へ共、禁獄ハ大病ニ候ハ、指出シ療養ヲ加へ、入牢人ハ其時之了簡取計可申候、前廉ニハ定置兼申候事故、其時に臨ミ郡奉行之決断ニて重て御咎ハ蒙り候とも、生前ハ拘り候事捨置申候ニ、不忍之一心ニて取計可然と、文化二丑十月、一同判断および候事

但、牢中へ看病人入候事、令ノ文有之候得共、不可然と一同申合候事

〔朱筆〕百姓・町人一同かり博奕催候節、穿鑿并咎

振之事

文化十五寅二月
一百姓・町人・一同かり博奕相催候節、取扱振之義御郡

方ニて本紬之上刑当申付候節、御町方ニても右ニ準シ、

紬之上夫々ニ刑当申付候様御町方へも相達候処、筋分内密紬之上刑当日論候様相達候節ハ、尤是迄之通被相心得、是又初発御町方人別之者拘りも有之様相聞候分紬、以前一先御町方へも懸合、双方熟談之上紬ニ取懸候様可被致候事

但、御町方ニて紬之上、百姓ニ拘有之分も本文ニ準シ、互ニ突当無之様兼て被相心得可被取扱候、其旨御町方へも相達候

〔九〕^{〔朱筆〕}郷士刑当取計振之事

享和三亥十月^{〔郡奉行・淑茂〕}
増子幸八郎^{〔同〕}

一御陣屋相建、郷中へ我々共罷在候上ハ、只今迄と違郷士共不心得之義も相聞候上ハ、逼塞、或ハ呵・押込迄と歟無伺、役所了簡之上取扱候てハ、如何可有之哉ノ事

〔家老・泰亘〕
朝比奈弥太郎殿
御付札ニて御達

郷士共不心得有之候節、早速叱・押込、其

次第迫て申出候義、不苦候

但、逼塞之義ハ、其役所切ニてハ不相成候

文化十四卯十二月
一郡番村郷士立原政五郎屋敷内ニ有之候隠居宅、自火ニて焼いたし候ニ付、指扣申出候処、伺之上七日為慎致免許之事

天保十二卯
一田伏村郷士齊藤又衛門屋敷内ニ有之候土蔵壹棟致焼失候ニ付、恐入指扣申出候処、郷士共壹軒焼候節慎振前例不相見ニ付、幾日為慎可然哉伺出候処、右ハ日数七日為慎置候様、若年寄衆御達之事

〔十〕^{〔朱筆〕}追放之者、所持之品欠所振心得之事

文化十二亥十一月
一追放者刑目論伺之内、所持之物欠所申付候義、軽重ニより指別有之候得共、以来 御城下又ハ居村ハ五里四方御構以上之者、欠所に取扱候様可被相心得事

但、右以下之刑当申付候ものニても大赦被仰付候者ハ、欠所ニ不及候事

〔十一〕^{〔朱筆〕}病者案駄送り取計等閑之村役人咎振之事

文化十四二月御達

一高萩村庄屋忠左衛門と申もの、病者村送之義ニ付過料申付候義

公儀御振合ニ準シ取扱候見合ハ有之候得共、初発相達候通之免赦ニて可然候条、以来此度之例ヲ以取扱候様、

同役中へ可被申合候事

一高萩村百姓市衛門・善次と申もの、同心病氣之由ニて

宿ヲ乞候ニ付為致止宿、医師相懸治療相加へ快方ニ趣候処、未步行難相成候間、在所迄家駄ニて送り呉候様申聞ニ付致事岡庄屋へ為願、庄屋取扱ヲ以上入の村へ指向送り遣候途中病体相重、右村地内へ入致病死候処、右村方之者ニ無之ニ付、其段訴ニ相成候処、右病者村送之義願出、庄屋方々願尋候迄無届、殊ニ生所も不承届留置候段、御触之振候取扱不念ニ付、叱・押込五日一同村庄屋市右衛門任申立、人元ヲも得ト不承、殊ニ支配所ニも不申立、自己之計ニて村次送り出候段、御触之振候取扱不念ニ付、過料錢五百文

弁抱いたし候段ハ無相違候得共、御触之趣心得、差残草新寺町之もの之由ニて往来手形も有之候、在所へ送届呉候様藤内任頼領主役場

へも不訴出、送り書付相認メ送り出候後、出

張役場へ相届候段申立候処、右仕様不埒ニ付、

庄屋過料錢三貫文、組頭共ハ一同屹度叱置候

旨

公儀御勘定奉行方御届有之事

〔朱筆〕
〔十二〕新宮建立御規定之事

一御領内一統寺社共ニ不有来堂社等致新造候義、願無之候てハ不相成義ニ候処、近来心得着候面々も有之歟ニ相聞候処、次第世柄悪く寺社共所務方相減、今日之輕當ニも六ヶ敷、隨て有来之堂社々修理も怠り候分限ニ相見、自力ニ難叶候ハ、自然と氏子、且宗之願助力候程ニて而、新造之企等ハ弥致衰微候基ニ有之、たとへ其発端ハ、氏子且宗共之内、身上向相応之者、何々願望等ニ而不得化力致、新造ニても終之義ハ難計、一旦勸請之堂社容易取崩候義不相成候得ハ、於其寺其社永々之不益ハ勿論、俗家之費へも抱り候義ニ有之不宜候間、向後新造ハ大小共に堅停止被仰出候、有来之分建替修覆たりとも、元ノ間数より詰候義ハ不苦、延候

義ハ、決して不相成候、其外作事之致度有来々致結構候義、是又可為無用候、寺社共ニ其分限リに、作事ハ致少躰修理ヲ不忘、行届候様心懸可申候、（マ）

寛政三亥

寺社奉行所

三月

諸寺院中

諸修驗中

諸祠官中

前頭御触以來、今以右之居リニ相成居候事

〔朱筆〕 給人手形引替延引村役人咎振之事

一 正月役所御用始迄ニ引替濟候分ハ、刑当見捨

一 御用始ハ正月中、延引之分ハ叱・押込 五日 庄屋
三日 組頭

一 二月中迄延引立分ハ叱・押込 十日 庄屋
五日 組頭

一 三月迄及延引候分ハ閉戸、但、組頭ハ庄屋之日数半減閉戸

一 組頭之内、不納無之分ハ不及咎候事

右之外、村役人取扱候旨義有之故障ニも可相成分ハ、

臨時之了簡を以刑当申付候筈之事

〔朱筆〕 孕婦改方村役人等閑咎振之事

一 庄屋 閉戸七日 一支配組頭 閉戸五日

一 五人組合 閉戸五日 一孕婦之夫 禁獄十日

右懷婦改之節、四・五ヶ月以上之分村役人ハ不申出、

支配手代廻之節見出候節咎振 享和三亥十月申合候事

一 同 出生訴指出候砌、妊身申出無之類ハ、旨義ハ当人閉戸、

又ハ叱・押込七日、村役人叱捨申付候事

一 文政六未七月寄合 妊身改刑法区々ニ付、以來改方申合候事

軒別之節、妊身之者見咎之刑

一 享和ノ度ノ通り 孕婦夫禁獄十日 庄屋閉戸七日 支配組頭同五日

五人組合同七日

妊身訴定月延引之刑

一 夫叱押込三日 庄屋・組頭・五人組合叱捨

妊身出生共申出なく、追て見出候者之刑

一 夫閉戸十日 庄屋、閉戸七日 支配組頭同五日

五人組合同七日

無訴之者無事出産并胎死ニても格心無之者之

刑

一 夫手錠七日 庄屋・組頭・五人組合、叱・押込五日
ツ、

但、旨義ニ今、当人叱・押込、村役人叱捨ニ
も申付候義、享和度之通、妊身之者当人今申
出候を申、役人脱落之刑

一 聞置候役人、叱・押込五日

妊身申出なく、其上胎死をも無訴追て顕之節、
刑等ハ先年定之通、御場所御吟味ニ可申出事

〔朱筆〕
〔十五〕 他参人へ御救金拝借願出、追て顕候節、村

役人等答振之事

文政六未七月 寄合ニて極ル
一 他参いたし候者之御救金等拝借願出、追て顕候節、当
人手錠十日、庄屋、叱・押込七日、支配組頭、同三日

〔朱筆〕
〔十六〕 川船無極印船所持之者相顕候節答振之事

天明三卯八月
一 各扱下ニて 船持共無極印船相用候者も有之内相聞、不

束至極ニ付、以来右等之者有之候ハ、左之趣ヲ以答
可被申付候

〔禁獄十日〕
船欠所 当人

但、船の大小新古等見届、其時々伺出可及指
図事

〔閉戸十五日〕 庄屋

〔叱・押込五日〕 支配 組頭

但、船役人有之候村方、右等之義有之候ハ、

〔叱・押込十日〕 庄屋

〔船役金一ヶ年 過料〕

但、外ニ右役之組頭ハ有之候ハ、不及叱・押
込、為過料舟役金一ヶ年分半金宛可出事

〔朱筆〕
〔十七〕 御目附方廻之者見答候入穀答振之事

一致入穀候者、於御目付方見答候分、於御郡方ニ穿鑿取
掛り候内、其預ヶ候てハ輕過候間、手錠・村預ヶ申付
置相糺候て可然旨申合事

但、糶様之もの袋入等ニて極少分之義ハ、其
節之指略可有之事

文化十四丑上月
一 他所穀買入御制禁相犯候者前例有之分ハ、無伺刑当取

計来候処、御目付方ニて見咎候入穀人、刑当之義もの
例有之分ハ、役所切ニて刑当取計度旨、友部正介〔郡奉行・好正〕の伺
出候処、右ハ伺之通可取計旨御達之事
天保十四卯閏九月十六日御達
一入穀之義、御目付方より見咎相成候刑当取計之義、其時々
委細ニ御目付方へ申出候様、御郡奉行中へ御達之事

〔朱筆〕無願他所參詣咎振之事

文化十一戌九月御達
一百姓共無願他所神仏へ致參詣候者、当人禁獄日数十日

申付候様相達置候処、右禁獄之咎ハ相止、以来当人過
料錢五貫文申付、庄屋・組頭等過料員數ハ、是迄之通
居置、尤意味有之分ハ、前々之通禁獄、又ハ追放ニも
取扱被成候ハ、格別御仁惠難有可奉存哉ニ御座候、
乍去、御取付上ケ御免と申義相響候てハ、是又馳ニ可
相成候間、右之處ハ不申触、役所懷ニいたし取扱候ハ、
往々御模通も宜有御座候哉と申出候処、御取付上御免
之義ハ、役所懷ニいたし置、其時々了簡ヲ以咎申付候
様、御達之事

寛政十二申三月極ル
禁獄十日 当人

過料七百文 庄屋

〳五百文 支配組頭

〳五百文 支配十人頭

〳三百文ツ、五隣

村方より訴出候節
禁獄十日 当人
叱捨 庄屋
十人組

享保ノ例

一無願他所廻国等之者、往来証文致所持候節、印形いた
し候庄屋・組頭、閉戸十日

〔朱筆〕酌取女召抱置、客之相手ニ指出候者咎振之

事

天保 女ノ主人
一閉戸 十日 当人

一叱・押込 五日 庄屋

一同 三日 組頭

右、西支配所常葉村藤屋源丈と申もの、客之相手ニ指出
置候女召抱置候処、西組ニ前例不相見、御町方へ問合候
処、左之例申来、当人のミニて役人ハ何等咎も無之由
之処、博奕等ニ付ても村役人咎ニ相成、勿論右等之女指
置候を等閑ニ罷在候得ハ、村役人一ト通当り有候、締り

合宜様及了簡、公義御定ニも隠女有之節ハ、五人組過料、名主重き過料と相見、輕重ハ格別一同御省ニテハ不宜存候故、右御定之^(意カ)庄屋過料壹貫文、支配組頭五百文申付候哉、又ハ叱・押込五日、三日も申付候方可然哉之旨、西組合廻伏仕出、本文之通決着取計候事

天保十亥七月 相談留書拔

天保九戌年、役所了簡

一 泉町鈴木屋友七義、小売酒渡世いたし候由之處、売女同様の女客之相手ニ指出候趣相聞、不束之至ニ付、糺之上屹度申付候様有之處、今用捨閉戸十日

〔朱筆〕
〔廿〕 婚葬等奢侈ヲ極候者咎振之事

文政十三寅七月申合
一 閉戸七日位

但、旨義ニ合輕きハ叱・押込、又ハ家計ニ応、相当之過料申付可然旨申合候事

〔朱筆〕
〔廿一〕 村々配符紛失并滯候節咎振之事

天明元丑十月申合

一 禁獄日数七日

是ハ庄屋元ニテ紛失糺之上申出候分

一 閉戸日数七日

是ハ庄屋他行ニテ家内之者取扱同斷

一同 五日

是ハ庄屋元ニテ遅刻候分同斷

一 叱・押込日数七日

是ハ庄屋元ニテ取落、追て見出不願糺前申出候分

一同日数 五日

是ハ庄屋他所ニテ、家内之者取扱及遅刻候分、同斷

一 禁獄日数七日

是ハ配符番受取紛失、糺之上申出候分

一手鎖日数七日

是ハ右同斷取落、追て見出シ糺ニ不願前申出候分

一 叱・押込日数七日

是ハ右同斷於途中病氣遅刻之分、尤夜中ハ式人罷出候間、たとへ

老人病氣ニても(以下記載なし)

〔朱筆〕
〔廿二〕 乗打咎振之事

一 御家中并御奉公人へ乗打之刑、輕きハ繩、重きハ禁獄と大意ヲ極置、日数之義ハ、其時々了簡ヲ以決斷取計候筈申合候事

〔朱筆〕
〔廿三〕 裏判呼出指日延着之者咎振之事

一 過料錢三貫文 当人

但、御領内金錢出入目安裏書御済ニ相成候處、指日不參之者有之節、公辺御掟書ニ基キ、本文之通過料被 仰付候間、后後心得可申事

〔朱筆〕
〔廿四〕 摺取計之事

天保
一 摺召捕相尋、外ニ盜取等之惡事無之摺一条之義及白狀候ハ、其者之生所、御領・他領之無指別、片髮剃捧

縛（マツ）いたし、晒置候上、追拂取計之之筋御了簡相濟、御役所（マツ）も御達被相成候由、御達御座候付、御町内（マツ）にて召捕候ハ、其支配之名主宅にて相尋、御町内（マツ）にて晒置候上、御町外（マツ）にて追拂候様、同心共へ相達候処、同心共出役先等郷分（マツ）にて召捕候節ハ、其村庄屋等之宅にて相糺、摺一条之申口（マツ）も候ハ、庄屋預り置致出立、片髪剃縛等より追拂候迄之取計ハ、其村役人（マツ）御役所（マツ）へ伺之上取計候様いたし度、此段及御掛合候、

六月

御郡方

御町方

本文四郡相談之上、承知之旨及返書候事

以書附申触候

太田湊等之盛場ヲ始、近来摺所々へ入込、見世先之商品等被摺取難義之趣相聞ニ付、先年之御法ニ復シ、右等之者有之候ハ、召捕、最寄出役之支配又ハ山横目方へ指出、糺之上全ク摺一条ニ相決、外ニ惡事も無之候得ハ、他領もの之義ハ片髪剃縛（マツ）いたし、其日一日相晒シ、村外

へ等へ追拂可申者ニ付てハ、町同心御用先於郷中摺召捕候得ハ、其村之庄屋へ引立参り、糺之上是又外ニ罪科も無之、弥摺ニ決候得ハ、御国者他領もの之無指別、庄屋へ預ケ申付、同心共出立いたし候筈ニ有之候處、同人預り置、前頭同様最寄出役無之候ハ、山横目方へ申出、他領ものハ前頭同様取計、御国者之義ハ吃と押込置、出役無之候ハ、役所へ訴出可申、后後右之通相心得、山横目有之村方（マツ）ニてハ、此廻文為見留可申候、

天保
七月

惣郷触

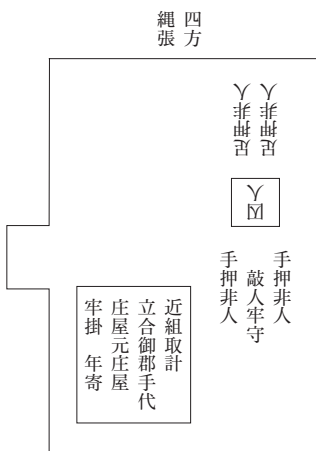
吉成又右衛門
〔郡奉行・信良〕〔朱筆〕
「廿五」敲刑之事

天保十三寅六月九日御達
一他領者之義、敲之刑御取行ニ相成候条、重キハ一日敲

ヲ限り可被取計事

一他領無宿者敲之刑取計振、御町方へ問合之処、平地へ庭所ヲ敷、其上へ罪人裸ニいたし、うつぶしニ引伏置、手足ヲ非人四人ニて押へ居、打人ハ罪人の頭の方へ立、足之方へ向ひ中腰ニて杖ヲ片手ニ持、背骨之兩脇の方ヲた、き候由ニて、外ニ六ヶ敷事ハ無之候得共、罪人之

功者之奴ハ座打候節啼出し候ニ付、不手馴打人ハ不便之情ヲ発シ、自然敲方弛候者之由、又敲方深過候得ハ、骨へいたみ、中ニハ腐候様相成、何程他所者ニて身軀不具相成候てハ不便ニ有之、依敲方手過減、郷中牢守へ可申含置候事



一 敲人牢守へ申付来候処、后後ハ非人へ申付為取計候所
筈之事

一 他領之者、敲之刑重キハ百敲ヲ限り御取行相成候旨御達御座候付、取計方委細御町方問合申候処、右刑当之節ハ、押之者立合罷出候由ニ御座候處、於郷牢取計之分多くハ小盗・博奕等之罪ニて追拂申候へハ、次第無

之分ニ有候様に、重立之分ハ御場所へ指出候事ニ御座候得共、於役所取計ハ押之者御指出ニハおよび中間敷と被存候、依此段奉伺候、
(ト)

十一月

御郡奉行共

御付札ニ御達
本文是迄押立合を受候刑ニて敲ニ取計候ハ、立合ヲ受、

敲一条ニ候ハ、立合ニ不及候

天保十三寅十月、御町奉行ノ廻文

他領者敲計

一 御国追放旨義ニ

五十
三十 敲

一 御国追拂

一 摺ハ片鬚剃、五十敲、棒縛ニいたし追拂
但、立掃候ハ、百敲之上追拂

〔朱筆〕
「廿六」徒刑之事

天保九戌九月廿四日御達

御町奉行
御郡奉行 中へ

一 百姓・町人并寺社人別之者、罪科有之追放・禁獄等ニ可相成者、以来別紙之趣ヲ以、徒刑申付候条、懸り御郡方へ可被引渡事

但、生得姦惡ニて徒罪申付候ても、良民之故障ニ相成候様之者ハ、是迄之通追放等ニ可申付候

一五里四方追放 徒壹ヶ年

一三三四方追放 同貳百日

一貳里四方追放 同貳百日

一居村追放 同百五十日

一禁獄七十日 同百日

一同 五十日 同五十日

一同 三十日 同三十日

一同 二十日 同二十日

一罷民之類 同二十日

以上
一博突宿いたし候者、自分加入又ハ不致分徒貳百日、又

百五十日、其後一ト通之博突へ加候者同五十日、其後

加候者同七十日、其後加候(者)同百日

一博突初ていたし候者、徒二十日

再犯候者 同三十日

又犯候者 同五十日

又犯候者 同七十日

又犯候者 同百日

但、再三犯候者旨義ニ追放ニ可致事
天保十亥十月申合
追放立歸之者、徒刑申渡之義振之事

其方儀、云々不束至極ニ付、再追放可申付処、御宥赦ヲ
以押込之上、人足役何百日申付もの也

村役人へ口達之覺

其村追放人、これ此度人足役被仰付候処、右日数勤終

候得ハ、以前之通歸村被仰付候處、其旨相心得可申事

天保十亥六月同濟、本文同濟之砌、諸郡区付小組今亥六月廻狀之砌
一追放人仮令ハ二・三三四方追放ニ相成候者、立歸居、

五里四方追放之刑ニ当り候ハ、御定之日数丈ヶ徒罪

被仰付、御構御免之事

但、一旦之過等ニて立歸候もの本文之通取計、

姦惡之者ハ是迄之通追放可申付事

一五里四方以上之刑所持之物、欠所之例ニ候処、徒罪申

付候へハ、欠所物御免之事

一郷町医共へ徒刑相除、寺社人之義も且過耳徒罪被仰付

候事

一徒罪逃去候者共ハ、都て死刑被仰付候事

以上

五里一郡并一・三郡構徒刑御定

天保十四卯四月
一五里四方構 徒十二ヶ月

一五里一・二郡構 徒十五ヶ月

一五里三郡構 徒二十ヶ月

一御領中構 徒二ヶ年

一天保十四卯八月十二日御達徒刑之法御取行ニ相成候ても、生質姦惡、且身軽等之

ものハ、追放ニも申付、入穀等ニて五里四方以上之刑ニ

当り候者、先ツハ勝手向も相応、株式等も有之候得ハ、

徒刑中犯科之憂も無之、ケ様之類ハ勿論徒罪申付、村

役人并家筋等格別之者之内ニも一時之罪科ニて、二十日、

十五日の徒刑ニ当り候者も出来候処、右様之もの一旦

徒刑ニ相成候ニてハ、たとへ役義御居置可然者ニても、

人理役威ヲも失ひ、役義等ハ相勤兼候事ニ至り可申、

是等之類ハ、其人物等ニ合、廉恥之心ヲも養ひ、禁獄・

閉戸等ニ申付候筈伺、相済候事

一山博奕可相催と集り候而已ニて末勝負ニ不及徒、并博奕

之場ニ傍観いたし居候者ハ、都て半減之刑当申附候筈、

丑十月寄合ニて相談決ス

一弘化三年十一月、南部被出他領者御領内へ参り、当座店借罷在、博へ加入いたし

候者、御国追拂之取計来候処、宿いたし候者ハ五十敲

之上追放申付可然哉、諸郡問合、五十敲ニ追放決ス

〔朱筆〕
「廿七」徒刑大赦之事

一天保十一子七月申合式里四方追放徒式百日

赦禁獄七十日

一居村追放 同 百五十日 同 五十日

一禁獄百日 同閉戸五十日

一同七十日 徒刑とも 同閉戸三十日

一同三十日 同閉戸十五日

一同二十日 同閉戸十日

一同十五日 同閉戸七日

一同十日 同閉戸五日

嘉永四年三月朔日
〔郡奉行・綱克〕
尾羽平藏へ

本文吉田村弥市・茂兵衛徒刑大赦振之義、四郡申合之上

追々閉戸申付来候間、伺出之通申付度、再申出之趣ハ有

之候得共、抱り之山野辺兵庫殿下屋敷守喜介刑当も相済

候義ニて、不平ニも相成不可然之条、弥張最初相達候通、

呵・押込被申付候、且刑当大赦振之義ハ、以後左之通り

相心得、四郡可被申合候

大赦之刑通例

一過料可申付者ハ、赦以来之義可達

一 呵捨ハ、赦何等ニ不及、以来之義

一 呵押込ハ、赦呵捨

一 禁獄・閉戸・手錠ハ赦、呵・押込

但、本刑之日数半減ヲ以、呵・押込之日数ヲ用ル

一 居村追放ハ 赦禁獄十日

一 御城下并居村御構ハ 赦禁獄十五日

一 御城下并居村二里四方御構ハ 赦禁獄二十日

一 御城下并居村三里四方御構ハ 赦居村御構

一 御城下并居村五里四方御構ハ 赦御城下并居村御構

一 御城下并居村五里四方其外一郡御構 御構ハ 赦、御

城下并居村式里四方御構

一 同二郡御構ハ 赦御城下并居村三里四方御構

一 御領中御構ハ 赦御城下并居村五里四方御構

右之通り

〔朱筆〕

〔代〕 被盜品訴延引等答振之事

天保六未七月
一 被盜品訴延引少分之品ニ候ハ、叱捨

但、当人計村役人訴延引いたし候ハ、村役人
計

一 盜品と不心付質ニ取、或ハ買取候類、右同断

天保十三寅六月御達
一 郷中被盜品瑣細之品訴延引之分、咎不申付訴無之分ハ、

是迄之通品指戻申間敷候事

〔朱筆〕 十五才以下刑之事

文政四巳年六月
一 十五才以下之者盜等之犯科有之候とも、大人と違候故、

刑之御定等も可有御座哉、又ハ其義無之候ハ、御行

振御手前被成度よし御問合之趣致承知候、然ル処、十

五才以下之者ニ限り、刑法之御治定も無之様相見申候

へ共、別紙辰太郎之外、十三・四才之幼少之者盜等之

惡事いたし候ても、前後之無勘弁罪科ヲ犯候もの、御

仁恵ヲ以本刑ニハ不被仰付、大低ハ一類等之御預ケ、

禁足、或ハ品より輕き御追放等被仰付候事ニ御座候、

依段如及御達候、メ

六月廿四日

御町方

八田御郡方

同六未五月
一 犯科候者幼年之故ヲ以、本刑御用捨ニ相成候旨、十五

才迄ニ可有之哉、又十六才迄ニ可有之哉之境、刑当取

計候、前例八田組合諸郡へ問合有之候事

常葉組付札
一文化元子十一月、飯島村百姓武左衛門孫多太郎十三才、

行跡不宜、小盜等もいたし候ものニ候へハ、手錠十日

ニテ濟候事

公義百ヶ條之内、書拔十五才、以下之御仕置

一子心ニテ弁なく人殺・火付、十五才迄ハ親類へ預ケ置、
遠島、盜いたし候者ハ、大人ハ一等輕く、無宿者途中
小盜いたし候類、外人之手下、但、深キ比有候分ハ同
之上

御書付致拜見候犯科之者、幼年之故ヲ以本刑御用捨ニ
相成候例有之や之旨、御問合之趣承知いたし候、十六
才ニテ本刑御宥ハ相見不申、十五才以下逆も刑法之御
治定無之様相見候得共、十三・四才之幼年者盜等之惡
事いたし候ても、前後之無勘弁、科ヲ犯候もの御仁恵ヲ
以、本刑に不被仰付、大低ハ一類等ノ御預ケ禁足、或
ハ品ニ合輕キ御追放被仰付候事^(二)御座候、依此段及
御達候、メ^(一)

五月十九日

御町方

常葉御郡方

尚々本文御用捨之義も一等御弛メと申、屹といたし候

例も相見不申候

〔朱筆〕
〔卅〕裁許取計心得之事

一裁許取計之節、当人相果候旨申出候ハ、右之刑親類
之者呼出候て裁許之趣、当人死亡ニ付内緒之者へ心得
候相達候事

〔朱筆〕
〔卅〕除帳之者、追放取計振之事

申^{十一}月御達
一村々ニテ人別相除帳外者、御国追放、御国追拂、追て
相極置候てハ故障之筋も可有之旨申出候、委細尤ニ相
聞候得共、御町牢へ入獄申付置、夫々吟味之上、帳外
者御国追放并追拂と先達て相極候間、於役所も右之通
相心得、以来取扱可申候、尤帳外者之内ニも、意味有
之帳外ニいたし置候ても、往々身持等相直り、百姓立
相成可申とも相見候哉、又訳も可有之と心付候ても有
之節ハ、其時之伺出得事□候様可致候、其余ハ相頭候
通、御国追放并追拂と相極置可被取扱事

〔朱筆〕
〔卅二〕牢死之者尸取計振之事

天保七申三月御郡奉行中へ御達
一致牢死候者、野捨等取計候節、左之ヶ条ヲ以、以後無

伺於役所取計、追て可被申出事

一 御領内人別ニテ罪状白状、禁獄シ御領中御構御追放ニ
上候、刑并解死人之刑、又ハ永牢被仰付置候者致牢死
候ハ、尸一類へ被下

一 帳外并立婦者、又ハ他領者之類ハ、科輕重申口候有無
ニ不拘、致牢死候ハ、尸野捨

一 御領内人別ニテ罪状及白状、焼印、御追放シ磔、火焙
迄之刑ニ相当候者致牢死候ハ、尸野捨

一 御国人別之者、罪状申口無之者致牢死候類ハ、尸一類
へ被下

但、重き御格心ニテ申口ハ無之ても、一類へ難
被下程之重罪ニ候ハ、可被伺出候

〔朱筆〕
〔卅三〕追放帳外人獄扶持代之事

一 追放帳外人元居村へ立婦居候節召捕候ハ、牢扶持代
ハ人別有之者之通、牢扶持代為指出可然候処、尚更役

所之振合御手前被成度よし、御掛合之趣致承知候、然
ル處、追放人等之義ハ、元居宅ニテ召捕候とも、牢扶
持代其處シ為差出候義中興無御座候、尤何ニも 上シ
被下ニ相成居、宅へ為忍置候故ヲ以、親・兄等へ御咎
被仰付候、尤追放人ニ候とも店をかし指置候へハ、人
別之有無ニ不拘、大店シ牢扶持代指出候義、先般シ之
御法ニ御座候、依此段旁及御相談候事

文化十年 丙十一月

御町方

常葉御郡方

文化十四 丑十一月

一 追放人御構之地ニ致借宅、追放人と存、其外惡候者へ
店ヲ貸、或ハ留置候類ニテ其者御召捕ニ相成、大屋又ハ
致宿候もの御咎被仰付候節、牢扶持代上シ被下候哉、
又ハ御咎ニ不抱宿いたし候者シ為指出哉之旨、先日御
問合申候処、追放人并無人別之者へ店ヲ貸置候ハ、
御咎ニ不拘牢扶持代為指出候御法之由、尤店受状大屋
ニテ取置候事故、大屋へ申付候へハ、店受人へ申付指
出候間、大屋難義も無之旨御挨拶之處、追放人又ハ無
宿もの宿いたし、其者御召捕被相成、入牢被仰付候節、
右宿御咎ニ不拘牢扶持代為指出候事ニ御座候哉、又泊

り屋等ニて旅人一宿為致、其もの召捕ニ相成候節、牢扶持代泊り屋御町方付札為指出候処ニ可有之哉之旨、御町方へ及問合候事

無宿者留置候迎も、店借同様ニ永ク同店為致候類ハ極別、一・二夜位留置候者へ牢扶持代為指出候類例、近来更ニ相見不申候、尤旨義ニより為指出候義も可有之候得共、睨と定り候御定ハ無御座候、且又泊屋御町方付札為指出候義ハ無御座候事

〔朱筆〕農商共役所呼出之節、羽織着用之事

天保十四卯十一月
一農商共役所呼出ニて罷出候節、羽織着用いたし候様、尤無人別無石高之者ハ、羽織着用不相成事

〔朱筆〕御城米等諸年貢惡品廉略等之事

〔記載なし〕

〔朱筆〕御立山盗木等閑刑振之事

一寺社境内ニおゐて、無極印之木柄、住寺任願代添いたし候元山呵・押込三日

〔朱筆〕諸人無之浪人者指置之刑之事

一指置候当人叱・押込三日、庄屋同三日、組頭共叱捨

大赦目当

本刑 一以来之義 一不及沙汰 一過料錢 一以来之義

一叱捨 一以来之義 一呵押込日數ニ 一叱捨

一閉戸五日 一叱・押込三日 一閉戸十日 一叱・押込五日

一閉戸五日 一叱・押込七日 一閉戸廿日 一叱・押込十日

一閉戸三日 一同五十日 一同五十日 一同廿日

一手錠五日 一叱・押込三日 一手錠十日 一叱・押込五日

一同十五日 一同七日 一同三十日 一同十五日

一同五十日 一同廿日

一繩下七日 一叱・押込五日 一繩下十日 一叱・押込七日

一同十五日 一同十日

一禁獄五日 一閉戸三日 一禁獄

一同十日 一同十五日 一同十五日 一閉戸七日

一同廿日 一同十日 一同三十日 一同十五日
 一同五十日 一同廿日

一 徒刑百日以下閉戸日数半減 七十日三十日 天保十一子七月申合
 五十日
 一同百五十日 禁獄五十日 一同貳百日 禁獄七十日

宝引之例区ニ付、文政以来之例書拔類多キヲ取集、
 少々斟酌之上四郡相談之上、嘉永六丑三月大意申

合之面

一 宿いたし候 男手錠十日 過料壹貫文
 女同 五日 過料壹貫文
 但、出入ハ不致候共

一 打寄男女共 過料壹貫文
 但、幼年之者ハ以来之義

一 留主中家内之者宿いたし候節、夫叱・押込七日

一 傍観いたし候者 過料五百文

一 組合 過料三百文

一 役人 叱押込三日 (庄屋
 支配組頭)
 叱捨 外組頭共

以上

《発表要旨》

神崎直美

浜松藩の人足寄場

人足寄場とは、無宿人の授産・更生施設である。その創設は、江戸幕府の老中松平定信主導による寛政の改革に求められる。これは城下町江戸に設置された。その目的は、都市の宿命ともいえる無宿人問題を解決するためである。その後、天保の改革の主導者である老中水野忠邦は、天保十三年（一八四二）十一月十一日に、いわゆる「無宿・野非人旧里帰農令」を発令し、人足寄場を全国幕府領および私領に設置することを奨励した。これを受けて人足寄場を開設したことが現在知られているのは、京都・大坂・長崎などである。確認されている事例は未だ少ない。

これらに加えて新たに指摘したい事例が、浜松藩である。浜松藩は天保年間当時、老中水野の所領である。水野は「無宿・野非人旧里帰農令」を発令するやいなや、

同月十六日には、自領の浜松藩の城下に人足寄場を開設するよう命じていたのである。開設を急いだ理由は、幕府側から無宿人の引き渡しがある予定であり、その受け皿を早急に整える必要があったからである。同時に、「無宿・野非人旧里帰農令」の発令者である水野としては、これを自ら率先して実行することは、その立場から必須であった。

浜松藩の人足寄場は、天保十三年十一月から同十四年三月までの間に立案され、同年四、五月に開設した。その後、水野家が転封する弘化二年（一八四五）十一月まで続いたものと思われる。この人足寄場の特徴は、あらゆる面において、幕府の人足寄場を手本としており、類似点が多々見られることである。とりわけ、無宿人に対する仁恵の措置である点や、その目的は勤労意欲を身に付けさせて改善すること、作業報償制、開設当初は入所期間に概ねの目安があるものの不定期だったこと、などが注目できる。

浜松藩の人足寄場の様子は、次の通りである。寄場の施設は、六棟建設することを検討している。これは分類

拘禁をするためであり、男女の別の他に、農業経験の有無、階層の差異によるものである。建物は、幕府の人足寄場と同様に、床は転ばし根太、竈は番屋に隣接した所に設置しようとしている。

寄場役人は、寄場奉行・寄場下役・寄場下番を配置する。寄場奉行は定員二名で、一日交代で勤務する。寄場下役は八人で、二組に分けて四人ずつ交代で当番にあたる。入所者に寄場条目を読み聞かせたり、人足が戸外で労働する折に立ち会う。門番の役目も担う。寄場下番は四人である。その他、収容者の部屋に世話役を配備して、収容施設内での生活の取り締まりをする。

人足の入所の手続きは、①幕府の寄場から浜松藩へ無宿人の身柄を引き渡す通告がでる、②浜松の寄場役所から無宿人の身柄を受け取りに江戸に赴く、③無宿人を浜松に連行する、④浜松の寄場役所で無宿人を取り調べて、供述調書を作成する、⑤寄場奉行立ち会いのもと、寄場下役が入所者に寄場条目を読み聞かせる、⑥入所者に遵守を誓約させるため爪印をとる、⑦入所者に身仕度をさせる、⑧入所、という過程を経る。

人足の処遇は、以下の通りである。衣類は、寄場役所が入所に四季施を支給する。髪型は、一般の人々と同じ髪型を装わせる。蒲団は一人に一枚ずつ宛てがう。食事は一日に三回で、寄場役所が支給する。その量は、労働によって差異があり、通常の労働の場合は一日あたり米と麦の混合を五合、重労働に従事した場合は六合か七合である。副業は朝食に香物や梅干、昼と晩に汁物がつく。三、四日ごとに鰯や雑魚を実にした汁もつく。さらに副業が欲しい者は、手業賃から購入して、自分で調理した。節句や年中行事の折には、特別な食事を支給した。風呂は終業後に利用できる。病気を煩った場合は、投薬したり医者に見せるなど、手厚く看護する。

労働については、勤務時間は朝五時（午前八時）から夕七時（午後四時）まで、すなわち八時間労働である。技術がある者は寄場の外で働いてもよく、技術のない者は炭団丸めや藁細工など、簡単な手仕事を行なう。重労働としては油絞りがあつた。労働には、賃金が支給され、その三分の一は寄場役所が手業預り銭として留め置いて、積み立てておき、人足が出所する際に資金として渡した。

以上の処遇は、いずれも幕府の寄場と極似している。

収容対象者は、当初は幕府の寄場から身柄を引き渡された者であったが、後に浜松藩が中追放に処した者も収容した。さらに、牢舎の者や全ての追放刑の者も収容することにした。これは、刑罰の代替である。したがって、寄場本来の保安処分という性質に加えて、新たに刑罰の執行場という要素も加わった。

以上、浜松藩の人足寄場の様子を具体的に示した。なお、幕府の人足寄場の特徴のうち、浜松藩の場合には確認できない点もある。それは、心学を講ずるというような積極的な教育、着衣による累進処遇的な措置、社会復帰を目的とした外遣いの制度、火災の折の解き放ちなどである。浜松藩は、幕府の人足寄場を手本としたものの、自領にふさわしい点のみを取捨選択および改正しながら導入したのである。

本発表は、拙稿「浜松藩の人足寄場―幕府老中水野忠邦の領内施策とその幕政からの影響について―」（『中央史学』二十五号、平成十四年）と、「浜松藩の人足寄場

史料―解題と翻刻―」（『地域文化研究』六号、平成十四年）をもとにした。